View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Musashino University Academic Institutional Repository

武蔵野大学学術機関リポジトリ　Musashino University Academic Institutional Repositry

人称代名詞「こなた」「おのれ」「てまへ」「そなた」の研究

著者	杉崎 夏夫
著者（英）	Sugizaki Natsuo
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	8
ページ	30-46
発行年	2020-02-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001092/

人称代名詞「こなた」「おのれ」「てまへ」「そなた」の研究

杉﨑　夏夫

（一）はじめに

『東海道四谷怪談』は四世鶴屋南北によって書かれた歌舞伎脚本で、文政八年七月に江戸中村座で初演されたものである。『東海道四谷怪談』ではお岩についての巷説や実際に起こった戸板流し事件など、様々な場で社会の関心が向けられている時事を織りまぜた内容となっている。このように常に社会へ関心を持ち庶民の暮らしをよく観察していたことや、彼自身が江戸で生まれ育ったという点からも江戸の言葉に通じていたことは明らかであろう。

そこで『東海道四谷怪談』を研究資料として調査をすすめ、当時の人称代名詞について考察を加えることとする。すでに(注1)「人称代名詞「あなた」「おまへ」の研究」に於いて「あなた」「おまへ」の二語について論述を行っている。本稿はその続編に当たるものであるため、研究方法等は本稿では省略する。先の論文を合わせてお読みいただければ幸いである。

本稿では、比較的用例数の多い対称代名詞「こなた」・「おのれ」・「てまへ」・「そなた」についての考察を加えることとし、先の論文の研究方法に従って各語ごとにその使用状況を調べていくこととする。

（二）「こなた」

『東海道四谷怪談』における対称代名詞「こなた」の使用例は四十一例ある。先ずはいくつか使用例を挙げ、考察をする。

①四谷左門→民谷伊右衛門

いつたん聟舅の縁組は致したれど、最早娘のお岩をも、この方へ引き取るからは、聟でもなく、舅でもござらぬゆゑ……そりや御自分の心に問はつしやい。もつとも娘のお岩めも、不所存にてころび合ひ、親のゆるさぬ夫婦仲。畢竟やらう貰ふと、きつと致した仲立ちもなけれども、そりやこの道ばかりは別なものと、そのまゝに捨ておいたが、

気にはさへられな、聟のこなたの根性が、舅のおれが気にいらぬ。（42―11）《42頁11行の略》

②伊藤喜兵衛→民谷伊右衛門

サ、、そこでござる。孫めが事が不憫に存じ、聟に取らうも女房持ち。ア、どうがなと工夫をこらし、お弓にも知らさず、身が覚えをる面体崩るゝ秘宝の薬。お岩殿に呑ませなば、たちまち相好かはるは自定。その時こそは、こなたが女房に愛想がつき、別れ引きにもなつたなら、跡へ持たせるこの孫と、悪い心が出たゆゑに、口外せねど、さつきにこなたへ血の道薬と、乳母に持たせて遣はしたるは、面体かはる毒薬同前。しかし命に別条なし。そればかりを取得にして、よもや罪にもなるまいと、お岩のところへやつたるが、事叶わねば身の懺悔。それだによつて殺して下さい（160―7・9）

③小仏小平→民谷伊右衛門

旦那様、エ、こなたはの〳〵……イヤ〳〵〳〵、両手も口も叶はねど、お岩様をこのやうに、気をもみ死にゝ殺したも、みんなおまへのさつしやるわざ。コレ、なにもかもあの按摩取りがお岩様に向ひ、隣屋敷の喜兵衛様と言ひ合せたる一部始終、ことに面体たちまちに、相好変へたも薬のわざ。現在女房いまさらに、宿なしにしてその身の出世。どうしてそれが栄えませう。エ、おまへ様は、見下げはてたお人だなう。（188―11）

④庄七→長蔵

コレ、こなたはあの万年橋へ流れついた戸板の死骸の噂をまだ聞かないか（232―1）

⑤直助→宅悦

これは御挨拶だ。ときにまだこなたは浅草に居るのか（257―8）

⑥長蔵→仏孫兵衛

これ孫兵衛殿、わしもさつきから来て待つてゐるが、米の代はどうさつしやる。この内儀が言ふには、こなたをふんばぐとも、踏みこくるとも勝手にしろと言ふによつて（323―3）

⑦お槇→中間

コレ、こなたは先へ帰つて言はうには、わしはたゞ今帰りまするとお上へ申してくだされ（138―11）

⑧お岩→宅悦

オ、、もどつてか。こなたの跡へ伊右衛門殿がもどつてござんして、釣つた蚊屋まで取り上げて（176―8）

⑨お熊→長蔵

エ、、こなたも女をとらまへて、とやかう言はずと、親父殿に会つて着物をふんばくとも、踏んのめすとも勝手にさつしやいナ。コレ質屋の若イ衆、ぐぢ〳〵言つてゐられては、わしらも痛くない腹を探られるやうな心持だ。なにもかもあらひざらひぶちまけて言つてしまはしやい（320―4）

⑩お熊→小塩田又之丞

対応表A 「こなた」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
男	四谷左門 →伊右衛門	こなた	～ござらぬ	～しゃる	問はしやい	おれ このはう	引き取る 捨ておいた 気に入らぬ
	伊藤喜兵衛 →伊右衛門	こなた	～ござる 愛想がつき 別引にもなつたなら		殺して下さい	み	存じ 覚えをる 持たせて遣はしたる
	小平→伊右衛門	こなた おまへ おまへさま	殺した さつしやる 言ひ合せたる 栄へませう				叶はねど 見下げはてた
	庄七→長蔵	こなた	聞かないか				
	直助→宅悦	こなた	居るのか				
	長蔵→孫兵衛	こなた	～さつしやる			わし	来て 持つてゐる
女	お槙→中間	こなた	帰つて言はう		申して下され	わし	
	お岩→宅悦	こなた	もどつて				
	お熊→長蔵	こなた	とらまへて 言わず 会つて		さつしやいナ		
	お熊→又之丞	こなた		～だ			

エ、、盗人たけ〴〵しいとはこなたの事だ　（326―8）

次に対称代名詞「こなた」と対応関係にある対称の動作・存在に関する表現を調べることにより、「こなた」の待遇意識の程度を探る。先ずこれらの用例に表れた対応語を図表にすると、対応表A図になる。

このように「こなた」の語群では、対称の動作・存在に関する動詞には「愛想がつく」「別引きにもなったなら」などの平常動詞のみの表現、あるいは、平常動詞に終助詞「か」のついた「聞かないか」「居るのか」の形が見られる。平常動詞「殺した」に関しては「さっしゃる」が文末で対応しており、「言ひ合せた」についても「栄えませう」（「栄える」＋丁寧「ます」＋推量「う」）が対応している。また、丁寧語である「～ござる」といった敬語表現との対応もある。命令表現では平常動詞「問ふ」の促音便に尊敬の助動詞「しゃる」のついた「問はっしゃい」や、尊敬語「下さる」のついた「殺して下さい」といったあまり敬意の高くはない敬語表現と対応をしている。以上のうち、敬語表現と対応した使い方をした者は四谷左門、伊藤喜兵衛、小仏小平の三人で、彼らは武士あるいは武士に仕える中間といった立場の者で、武士ことばと考えられる。

次に女性の使用を見てみると、「もどってか」「とらまへて」「言はず」など、すべて平常動詞と対応している。命令表現では謙譲語「申す」に尊敬の「下さる」のついた「申して下され」や尊敬語「～さっしゃる」に命令を表す助詞「な」のついた「さっしゃいナ」といった敬語表現との対応が見られる。

このように「こなた」は男性に関しては平常動詞と対応するものと、敬語表現と対応するもの二種類が考えられる。

女性については、平常動詞と敬語表現が混合された状態で使用されている。男性語の場合とは異なり、明確な差はないと考えられる。

次に「こなた」の語群がどのような待遇意識により使用されているかを知るために、この対称代名詞を使用している人物間に存在する身分的関係を把握しておく必要があると考え、「こなた」の語群がどのような人物間において使用されている代名詞かを調査し、対称代名詞「こなた」の使用において基礎となる待遇意識を明らかにした。その結果を次の図表Bに図示する。

図表Bを見ると目上の者かやや目下、もしくは対等な者に対し使用されていることがわかる。その中で、やや目下のものに使用した四谷左門、伊藤喜兵衛、民谷伊右衛門に関しては、相手に対して借金や頼み事をしている場面で使用されたものである。よって、身分関係では目下にあたる相手だが、丁寧な言葉

図表B　「こなた」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
こなた	42	11	男	四谷左門	民谷伊右衛門	男	↓	
こなた	45	2	男	四谷左門	民谷伊右衛門	男	↓	
こなた	51	4	男	奥田庄三郎	佐藤与茂七	男	—	
こなた	144	5	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	159	6	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	159	8	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	160	7	男	伊藤喜兵衛	民谷伊右衛門	男	↓	
こなた	160	9	男	伊藤喜兵衛	民谷伊右衛門	男	↓	
こなた	161	1	男	伊藤喜兵衛	民谷伊右衛門	男	↓	
こなた	161	1	男	伊藤喜兵衛	民谷伊右衛門	男	↓	
こなた	161	2	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	188	11	男	小仏小平	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	188	11	男	小仏小平	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	220	3	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	220	6	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	220	7	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	232	12	男	庄七	長蔵	男	—	
こなた	257	8	男	直助	宅悦	男	—	
こなた	261	3	男	直助	宅悦	男	—	
こなた	274	12	男	直助	佐藤与茂七	男	—	
こなた	275	11	男	直助	佐藤与茂七	男	—	
こなた	283	9	男	直助	佐藤与茂七	男	—↓	
こなた	293	13	男	仏孫兵衛	お熊	女	—↓	
こなた	313	10	男	庄七	長蔵	男	—	
こなた	323	3	男	長蔵	仏孫兵衛	男	—↑	
こなた	326	12	男	庄七	小塩田又之丞	男	↑	
こなた	329	3	男	長蔵	赤城伝蔵	男	↑	
こなた	385	7	男	民谷伊右衛門	秋山長兵衛	男	↓	
こなた	385	9	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	385	12	男	民谷伊右衛門	秋山長兵衛	男	↓	
こなた	394	5	男	関口官蔵	民谷伊右衛門	男	↑	
こなた	138	11	女	お槙	中間	女	↓	
こなた	176	8	女	お岩	宅悦	男	↓	
こなた	320	4	女	お熊	長蔵	男	—	
こなた	326	8	女	お熊	小塩田又之丞	男	↑	
こなた　○	278	1	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—↓	町人真似
こなた　○	280	5	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—↓	町人真似
こなた　○	280	11	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—↓	町人真似
こなた　○	281	13	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—↓	町人真似
こなた　○	283	4	男	佐藤与茂七（町人）	直助	男	—↓	町人真似
こなた　○	358	14	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	夢の場

○：特別用法

を使用しているのだと考えられる。

女性の場合は使用例が少ないので、用例不足により断定することはできないが、目下もしくは対等な相手に使われる語であると考えられる。「お熊→小塩田又之丞」に関しては、身分的な面だけでみると目上に対し使用しているが、日頃、又之丞を快く思っていない上に盗人だと確信に近い疑いを持っていることで、又之丞に対する敬意はないと考えられる。

このように「こなた」の語群の特徴は、男性語の場合は次の二種類があると考えられる。まず敬語表現との対応を基本とし、目上のものに対し使用する語であるもの。もう一つは、平常動詞との対応を基本とし、対等かやや目下のものに使用する語である。しかし「～さつしやる」等の敬語表現との対応もみられることから、先の男性語の「こなた」の使用よりはやや低い敬語表現ではあると考えられるが、あまりおおきな差異は認められない。女性の使用の場合は、敬語表現と平常動詞とのどちらもが併用される表現が対応をし、対等もしくは目下に対して使用される語であると考えられるが、先述したように用例数が少ないため、本稿では推測にとどまる。

（三）「こなたしゅう」

「こなたしゅう」の使用例は次に挙げる二例のみであるため、参考までに使用例を挙げる。

⑪仏孫兵衛→お槇・お弓

ア、物貰ひにしては、さて人柄のよい女非人。コレ、こなた衆はこの堀端に暮す様子ぢやが、ひよつとこゝへ杉戸へ女と男の死骸打ちつけた、浮き死骸が流れては来ませぬか

（208―1）

⑫お熊→長蔵・庄七

ハイ〳〵どつちからござりました

……こなた衆は西横町金屋米屋の若イ衆、おほかたろくな事ではござりますまい　（316―2）

男性、女性ともに一例ずつということで資料的に不足ではある。

これらの用例に現れた対応語を図表に整理すると、対応表C図になる。

男性の使用例の対称の動作・存在に関する動詞は、平常動詞の「暮らす」が対応している。また、対称に直接かかる語ではないが、文末で「来る」に丁寧の助動詞「ます」＋打消の助動詞「ぬ」＋終助詞「か」の付いた「来ませぬか」等が対応している。

対応表C　「こなたしゅう」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
男	仏孫兵衛→お槇・お弓	こなたしゅう	暮らす				
女	お熊→長蔵・庄七	こなたしゅう	ござりますまい				

また、「話し手→聞き手」の関係では、初対面の人物にものを尋ねるということで、よそよそしい改まった表現であるため身分関係以上のやや目上の待遇をしていると思われる。

女性の使用例である⑫例の対称の動作・存在に関する動詞は、丁寧語「ござる」に丁寧の助動詞「ます」＋推量の助動詞「まい」の付いた「ござりますまい」が対応している。「話し手→聞き手」の関係では、店の若い衆である長蔵・庄七がお金の取立てに来たという場面で、女性より男性に対しての使用であるが、あまり高い敬意は感じられずほぼ対等な立場であると考える。このように「こなたしゅう」の語群の特徴としては、男性語は敬語表現と対応し、やや目上に対して使用する語であると推測できるが、女性語は、敬語表現と対応し、対等な人物に使用される語であると推測できる。また、先の図表Bの「お熊→長蔵」の間で使用された⑨例と同一の人間同士の会話があることからみても、「こなた」の待遇段階と同様であると思われる。

（四）「こんた」

「こなた」の音転した「こんた」の使用例は、本作品では次に挙げる二例のみである。

⑬庄七→小塩田又之丞

この盗み手はみす〳〵知れた浪人殿、それとも盗人でないならば、それそこに金もあるではないか。薬とともに四品締めて元利六両たらず、勘定すれば盗人の……そんならこんたは、やつぱり盗人　（326―6）

⑭お熊→仏孫兵衛

こんたがそんな結構人だによつて、世間で仏孫兵衛と言ひますハ。その子も同じ代物ゆゑ、小仏小平。わしは身腹傷めぬ子のせゐかして、一倍間抜けに思はれます。そいつがこしらへた餓鬼だによつて、薄馬鹿の筋を引かぬやうに、根性をたゝき直さにやならぬ。エ、のかつしやい〳〵

（290―13）

⑬例は男性による使用例で、⑭例は女性による使用例である。

これらの用例に現れた対応語を図表に整理すると、対応表D図になる。

まず⑬例の男性における使用については、対応語が見られないため「こんた」が使用された場の状況をもとに推測を試みる。庄七は質屋の若い衆だが、店に泥棒が入り仏孫兵衛のところのもの数点と高価な薬のソウキセイが盗まれる。孫兵衛の家へ尋ねると、盗まれた掻巻を使っている又之丞を目撃する。また、病気の又之丞はソウキセイがどうしても必要だ

対応表D　「こんた」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
女	お熊→仏孫兵衛	こんた	のかつしゃい			わし	傷めぬ 思われます

と知る。状況証拠により盗人だと確信した庄七は、薬を返すかお金を払うかのどちらかにしろと迫る。そのような場面で使用された対称代名詞が、この「こんた」である。このような場面と、「こなた」が音転した語でもあることから「こんた」については「こなた」よりも敬意の低さがうかがえる。

次に、⑭例の女性における使用についてだが、対称の動作・存在に関する動詞として平常動詞「のく」の促音便に尊敬の助動詞「しゃる」の付いた「のかっしやい」が挙げられる。また、自称の動作・存在に関する動詞には、丁寧の助動詞である「ます」の付いた「思はれます」も対応している。

「こんた」の使用された場面は、孫の次郎吉のことで夫である孫兵衛と喧嘩をしている際に使用された語であるため、乱暴でぞんざいな表現をしていることから、女性における「こんた」には、敬語表現との対応も見られるが、喧嘩の際に使用されていることや、対応語が音転した語であることからも、「こなた」よりも敬意は低いものであると考えられる。

以上により、男性語・女性語ともに「こんた」については、「こなた」より敬意の低い語であると推測できる。

（四）「おのれ」

「おのれ」の使用例の二十三例は、全て男性の使用例であるため、以後、男性語として扱う。

次に、いくつかの使用例を挙げ考察する。

⑮伊藤喜兵衛→お袖

ハ、ア、さては塩冶浪人の身寄りの者と見ゆる。エ、ハ、売らぬと申さば買ふまいハ。軒をならべていくらもあるわサ……それをおのれにならはうか。こいつ、出過ぎた女めではござるわへ。（28―2）

⑯四谷左門→民谷伊右衛門

ハ、、、。おのれが心に引きくらべ、大事の娘を添はしておいたら、おのれこそ、夜鷹にがな売りこくるであらう。それが不憫さ二ツには、盗人根性のあるものを、縁者にしてはこの身のけがれ（45―11・12）

⑰尾扇→奥田庄三郎

ヤイ〳〵、このどう乞食め。せっかく旦那が合力なされた銭を、なんでおのれ捨てたのだ。冥利を知らぬやつでござるわへ……でもたつた今、愚老が見てをつた（49―7）

⑱民谷伊右衛門→宅悦

イヤ〳〵、待つ事はならぬぞ。いはばあの小平めは、取り逃げかけ落ち。捕へ次第、身が手打ちにせねば腹がいぬわへ。このやうな賃仕事致しをるも、浪人暮し、コリヤ慰みと申すものぢやハ。主人が栄えてゐらるれば、塩冶の藩中民谷伊右衛門、きっと致した侍ぢやぞ。なんと心得てをるのぢや。人主のおのれ、サア返答次第で、年寄りとは言はさぬぞよ（123―4）

⑲民谷伊右衛門→小仏小平

なに、穏便に致してくれろとか。イヤこいつ、不届きな

事をぬかすナ。おのれが取り逃げかけ落ちを、主の身どもがなに穏便に致すものか。まことにこいつ、あきれるほどなふといやつだ　（132―2）

⑳小塩田又之丞→小仏小平

エ、、聞きわけなくまだ止めるか。下部ながらもこれまでの、忠義に免じてゆるしおけば、某に恥じつらかゝせしその上に、なほも武士道捨てさせるか。もうこの上はおのれを手討に致した上、邪魔を払うていさぎよく切腹致す。覚悟なせ　（335―10）

㉑進藤源四郎→民谷伊右衛門

こりやゝい、聞きわけのない亡者より、無得心なる不義士のおのれ。あの母親めが縁につれ、敵高野の館へ取り入り、奉公願ふ道知らず。さすれば親の身どもまで、不忠の汚名をとるわいやい。エゝ見下げはてたる畜生めが……まだぬかすか。なんのおのれがその一言。この親は、エゝ聞くまい。かゝる未練な民谷の一族、武士の風上にも置かれぬやつ、親が手にかけ……勘当ぢや。親でも子でもないおのれ　（389―12　390―4・11）

これらの使用例に現れた対応語を図表に整理すると、対応表E図になる。

このように「おのれ」の語群では、「ある」「待つ」「願ふ」などの平常動詞のほか、相手を非難する意をあらわす終助詞「か」の付いた「止めるか」「捨てさせるか」や、聞き手に強く働きかける終助詞「ぞ」もしくは、それに間投助詞「よ」の付

対応表E　「おのれ」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
男	伊藤喜衛門→お袖	おのれ	売らぬと申さば ～ござるわへ	ぬ			見ゆる 買うまいハ ならはうか
	四谷左門 →民谷伊右衛門	おのれ	売りこくるであらう ある				
	尾扇→奥田庄三郎	おのれ	捨てたのだ 知らぬやつでござるわへ				見ておった
	民谷伊右衛門 →宅悦	おのれ	待つ 言はさぬよぞ	～ならぬぞ ぬ		み	
	民谷伊右衛門 →小仏小平	おのれ	ぬかすナ			みども	致すものか
	小塩田又之丞 →小仏小平	おのれ	止めるか 捨てさせるか		覚悟なせ	それがし	ゆるしおけば 恥じ面かゝせ 手討に致した 切腹致す
	進藤源四郎 →伊右衛門	おのれ	取り入り 願ふ 見下げはてたる ぬかすか				とるわいやい 聞くまい 置かれぬ

いた「～ならぬぞ」「言はさぬぞ」、格助詞「の」＋断定の助動詞「だ」で強い断定をあらわす「捨てたのだ」が見られる。また、「言う」の尊大語である「申さば」や、相手をののしる語である「ぬかす」に終助詞「か」・「な」の付いた形や、平常動詞「売る」にののしり表現「こくる」＋動作を強調する接尾詞「ある」＋推量の「う」が付いた「売りこくるであらう」もある。

図表F　「おのれ」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
おのれ	28	2	男	伊藤喜兵衛	お袖	女	↓	
おのれ	45	11	男	四谷左門	民谷伊右衛門	男	↓	
おのれ	45	12	男	四谷左門	民谷伊右衛門	男	↓	
おのれ	49	7	男	尾扇	奥田庄三郎	男	↓	
おのれ	123	4	男	民谷伊右衛門	仏孫兵衛	男	↓	
おのれ	132	2	男	民谷伊右衛門	小仏小平	男	↓	
おのれ	132	11	男	民谷伊右衛門	小仏小平	男	↓	
おのれ	133	12	男	民谷伊右衛門	小仏小平	男	↓	
おのれ	291	5	男	仏孫兵衛	お熊	男	—↓	
おのれ	334	11	男	小塩田又之丞	小仏小平	男	↓	
おのれ	334	11	男	小塩田又之丞	小仏小平	男	↓	
おのれ	335	3	男	小塩田又之丞	小仏小平	男	↓	
おのれ	335	10	男	小塩田又之丞	小仏小平	男	↓	
おのれ	335	3	男	小塩田又之丞	小仏小平	男	↓	
おのれ	346	2	男	佐藤与茂七	直助	男	—↓	
おのれ	389	12	男	進藤源四郎	民谷伊右衛門	男	↓	
おのれ	390	4	男	進藤源四郎	民谷伊右衛門	男	↓	
おのれ	390	11	男	進藤源四郎	民谷伊右衛門	男	↓	
おのれ ○	358	9	男	民谷伊右衛門(夢)	秋山長兵衛	男	↓	夢の場
おのれ ○	358	10	男	民谷伊右衛門(夢)	秋山長兵衛	男	↓	夢の場
おのれ ○	359	6	男	民谷伊右衛門(夢)	秋山長兵衛	男	↓	夢の場
おのれ ○	359	12	男	民谷伊右衛門(夢)	秋山長兵衛	男	↓	夢の場
おのれ ○	362	9	男	民谷伊右衛門(夢)	秋山長兵衛	男	↓	夢の場

丁寧語である「～ござるわへ」に関しては、「おのれ」の使用者である全ての話し手が武士や医者という立場の者であり、更に相手に対してかなり怒っているという場面での使用であるが、敬語表現を用いる武士ことばの表現を使用しているのは、自らの武士としての品位を保持だと考えられる。

自称における動作・存在に関する動詞でも、謙譲語である「致す」が数例見られるが、これも話し手は武士であり、相手に対しては怒っている場面であるが、先と同様の武士としての品位保持の表現と考えるべきである。しかし「言はさぬぞ」「ぬかすな」「ぬかすか」「見下げはてた」といった、相手をさげすんだ表現の動詞も対応していることから、対称代名詞「おのれ」は、平常動詞あるいは相手をののしったりさげすんだりするのしり表現に属す動詞との対応を基本としていると考えられる。

次に「話し手→聞き手」の関係を整理した図表Fにより見てみると、このように「おのれ」の語群では、ほとんどの使用例が目下に対して使用されていることがわかる。

これらの結果より、対称代名詞「おのれ」の語群の特徴は、目下に対し使用され、平常動詞やののしり表現との対応が基本となっている。

（五）「おのれら」

「おのれ」の複数形である「おのれら」は、本作品では男性による使用例のみで、次に挙げる二例のみである。

㉒民谷伊右衛門→宅悦・仏孫兵衛

なにと申しておのれら存じた品ではないが、この民谷の家に先祖より持ち伝へをる、ソウキセイと申す唐薬。こりや外々には少ない薬種。腰膝ぬけたる難病にも、用ゆる時はその功たちまち眼前の不思議。浪人の身の不自由ながらも、外手へさへも渡さぬ品。それを盗んでかけ落ちひろぎ、かゝる、コレ……このがた〳〵丸も、忘れて失せたあいつが一腰。雑物といふはこればかりだ。近所の衆も気の毒がつて、今朝早々に小平めが行方の詮議。俺も常ならかけ出すが、何をいふも折悪い女房の初産ゆゑ、人手が欲しさ雇つた小平め、かへつて主に手をつかせる。思へば〳〵腹の立つ。捕へ次第にぶち放すぞ。請人め、さやう心得うせをらうぞ　（123―11）

㉓赤垣伝蔵→庄七・長蔵

ヤイ〳〵、おのれら商人の身を以て、病人と申し老人を手込めに致す無法者、たゞおくやつではなけれども、その分ゆるして遣はす。きり〳〵この家を帰りをらう　（329―4）

次にこの二例の用例に現れている対応語を整理し、図表Gに図示する。

このように「おのれら」の語群では、「おのれ」の項と同様に武士の使用例のみであるため、平常動詞のほかに、「存じた」「致す」「～遣はす」といった謙譲語が相手の動作をあらわす動詞に対応しているが、相手に対して怒っている場面での使用であるため、相手に対する敬意ではなく、武士としての品位保持の表現として使われているものと考える。

更に、命令表現を見ると「帰る」に相手をののしる意を持つ「おる」＋命令の意の助動詞「う」のついた「帰りをらう」、また、相手を卑しめののしる語「うせおる」に助動詞「う」＋終助詞「ぞ」の付いた「うせをらうぞ」等が対応している。

自称における動作・存在に関する動詞には、平常動詞の対応がほとん

対応表G　「おのれら」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
男	伊藤喜衛門→宅悦・孫兵衛	おのれら	存じた		うせをらうぞ	おれ	渡さぬ かけ出す 雇つた 手をつかせる 思へば 腹の立つ ぶち放す
	赤垣伝蔵→庄七・長蔵	おのれら	致す		帰りをらう		ゆるして遣はす

図表H　「おのれら」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
おのれら	123	11	男	民谷伊右衛門	仏孫兵衛・宅悦	男	↓	
おのれら	329	4	男	赤垣伝蔵	庄七・長蔵	男	↓	

どであるが、「許して遣はす」という相手に対して尊大な気持ちをあらわす尊大表現も使用されている。

次に図表Hに示した「話し手→聞き手」の関係を見ると、二例とも、目下に対して使用している語であることがわかる。

これらの結果より、対称代名詞「おのれら」の語群の特徴は、目下に対し使用される語であり、平常動詞のほかののしり表現との対応もあると推測できる。また図表Fより、「民谷伊右衛門→仏孫兵衛」(123―4)の関係において、対称代名詞「おのれ」を使用している用例があることから、「おのれ」と「おのれら」の待遇段階は同一であると考えられる。

（六）「てまへ」

対称代名詞「てまへ」の用例は二十例である。それらは全て男性の使用例であるため、以後男性語として扱う。

次に用例を挙げる。

㉔佐藤与茂七→お袖

面目ない。イヤ、面目ないもすさまじい。コレお袖、手まへは〳〵。屋敷の騒動それよりして、互ひにちり〴〵別れたが、今まで便りもせぬおれゆゑ、モウ忘れはてゝ、このやうな勤めに出るのだナ。現在亭主がありながら男欲しさのいたづらか、あんまりあきれて、ものが言はれぬわへ〳〵　(72―13)

㉕宅悦→小仏小平

コレ〳〵、手まへゆゑにおれまでが難儀するハ。コレ、今まで親父も呼びつけられてゐたが、マア〳〵手まへ、どういふ心になつたのだ　(131―5・6)

㉖民谷伊右衛門→伴助

コレ手まへ、白湯をしかけてくれろ　(137―11)

㉗民谷伊右衛門→宅悦

コレ手まへ、飯を炊いてくれまいか　(147―4)

㉘民谷伊右衛門→お岩

サ、変つたと言ったは、オゝそれ〳〵、おれが喜兵衛殿へ行つて来た内に、手まへは大きに顔色がよくなつたが、それもさつきの薬の加減であらう。イヤ、顔付が大きに直った　(169―5)

㉙直助→お袖

コレ〳〵、手まへも馬鹿な事を言ふものだ。着物の模様や櫛のかたは世間に同じものはいくらもあるハ……そんならそれにしてもおいて、おれが工面が直つたなら、受けて手まへにやらうから、ちよつとこれを曲げて米屋の払ひを……なるほど、手まへも馬鹿律儀な。その心意気だものを、今時の女に似合はない、死んだ亭主へ義理を立て、かうしてゐても夫婦といふはほんの名ばかり。コレ、おらア毎晩変な心持だ　(246―9・13　247―5)

㉚小塩田又之丞→次郎吉

コレ次郎吉、それではすまぬ。こゝへ来い〳〵。サア、

対応表Ｉ　「てまへ」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
男	佐藤与茂七→お袖	てまへ	忘れはてゝ 勤めに出るのだナ ありながら			おれ	別れた 便りもせぬ あきれて 言われぬわへ
	宅悦→小仏小平	てまへ	なつたのだ			おれ	難儀するハ
	伊右衛門→伴助	てまへ			しかけてくれろ		
	伊右衛門→宅悦	てまへ	炊いてくれまいか				
	伊右衛門→お岩	てまへ	よくなつた 直つた			おれ	変わつたと言つた 行つて来た
	直助→お袖	てまへ	言う 曲げて 義理を立て	～ない		おれ おらア	直つたなら やらう
	小塩田又之丞 →次郎吉	てまへ	すまぬ 持って来た	ぬ ～ない	来い 申せ		

図表Ｊ　「てまへ」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
てまへ	72	13	男	佐藤与茂七	お袖	女	―↓	
てまへ	72	13	男	佐藤与茂七	お袖	女	―↓	
てまへ	131	5	男	宅悦	小仏小平	男	―↓	
てまへ	131	6	男	宅悦	小仏小平	男	―↓	
てまへ	137	11	男	民谷伊右衛門	伴助	男	↓	
てまへ	147	4	男	民谷伊右衛門	宅悦	男	↓	
てまへ	169	5	男	民谷伊右衛門	お岩	女	―↓	
てまへ	214	13	男	民谷伊右衛門	直助	男	↓	
てまへ	215	3	男	民谷伊右衛門	直助	男	↓	
てまへ	218	6	男	直助	お弓	女	↓	
てまへ	246	9	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	246	13	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	247	5	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	250	11	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	252	1	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	252	14	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	254	6	男	直助	お袖	女	―↓	
てまへ	324	8	男	小塩田又之丞	次郎吉	男	↓	
てまへ　○	181	2	男	宅悦(口真似)	お岩	女	↑	口真似
てまへ　○	359	2	男	秋山長兵衛(夢)	民谷伊右衛門	男	↑」	夢の場

なんにもこはい事はない。手まへが持つて来たとほり、こゝで有体に申せ〳〵　（324―8）

これらの用例に現れた対応語を図表に整理すると、対応表Ｉ図になる。

このように「てまへ」の語群では、平常動詞に、格助詞「の」＋断定の助動詞「だ」の付いた「なったのだ」や、終助詞の「な」が付いた「勤めに出るのだナ」、推量の助動詞「まい」＋終助詞「か」の付いた「炊いてくれまいか」もあるが、多くは「忘れはてゝ」「直った」「曲げて」「持って来た」などの平常動詞との対応である。命令表現では、尊大な意を表す「申せ」や、相手を軽視する意の「くれる」が付いた「しかけてくれろ」といった語が対応している。

次に「話し手→聞き手」のおける身分関係を調査し、次の図表Jに図示する。

図表Jより「てまへ」の語群の身分関係は、やや目下もしくは目下を示している。

これらの結果より「てまへ」の語群は、平常動詞が基本的な対応をし、やや目下か目下に対して使用する語である。

（七）「そなた」

対称代名詞「そなた」の用例は三十四例あり、そのうち十八例は男性の使用したもの、十六例は女性の使用したものである。

次に用例を挙げる。

㉛佐藤与茂七→お袖

さう言われてみれば一言もないが、さぞかし今ではいかい苦労。おれも折々そなたのところへ便りもしようと思うてゐれど　（74―6）

㉜直助→お袖

ハ、、、、。お為ごかしにあやなして、以前の男の与茂七を、かばひ立てする言葉のはし……そんならそなたが与茂七を、酒に酔はしてこのところへ　（286―7）

㉝小塩田又之丞→お花

お花、そなたさぞ待ち遠であらうナ……夫小平は雇ひ奉公、妻のそなたは女の身として夜商、その艱難の暮しの中へ、かやうに長々の病気にてのかゝり人。それをうたてくも思はず、よう世話をしておくりやる親切。コレ、寝た間も忘却は致さぬぞや、忝ない〳〵　（289―14　299―3）

㉞仏孫兵衛→お花

コレ〳〵〳〵お花や、酒買うて帰りに、ちよつと法乗院様へ寄つて、ぢゝがお願ひ申しておいた物を下されませと、そなた持つて来て下され……なんであらうと持つてくればわかる。コレ、必ず、恂りせまいぞや　（308―1）

㉟お袖→直助

かけもかまはぬ小者のそなた。それほどまでに、この身を思うて……以前そなたは下部直助、わたしがとゝさん左門様とは、将監様は同じ格式。その小者の軽い身でゐながら、浪人したとあなどつて、わしをとらへてあたいやらしい。聞く耳は持たぬわいなう　（30―2・7）

㊱お岩→お袖

ア、これ。なるほど、朝夕貧しい暮しをするゆゑ、その

対応表K 「そなた」

		対称				自称	
	話手→聞手	代名詞	動詞	助動詞	命令形	代名詞	動詞
男	佐藤与茂七→お袖	そなた					言われてみれば 便りもしよう 思うてゐれど
	直助→お袖	そなた	あやなして する 酔はして				
	小塩田又之丞 →お花	そなた	待ち遠であらうナ 思はず しておくりやる				致さぬぞや
	仏孫兵衛→お花	そなた	買うて 寄つて 恟りせまいぞや わかる		持って来て下され		
女	お袖→直助	そなた	思うて ゐながら とらへて あなどつて			わたし わし	持たぬわいなう
	お岩→お袖	そなた	する 思いやる 見ゆる ありながら しても			わし わしら	かゝへてゐる 聞けば 言はねばならぬ 言はれぬ 勤める
	お岩→宅悦	そなた	しやる				ゆるさぬぞよ
	お弓→お槙	そなた	案じて 忘れぬ			わしや	かゝる 腹が立つわいの 思わぬわいの 思はぬ 思ひ廻す
	お熊 →民谷伊右衛門	そち そなた	知りやる 切つた 殺してのいた 死んだ			わし	案じ 逢うて 別れて 聞いた 願うて出て 救はう 思ふ 書いた
	お熊→お花	そなた	へり出した			わし	かはいがつてやれば ～して

やうに思やるも尤も。また、わしがこのやうな物かゝへてゐるゆゑ、なほさらさう見ゆる筈ぢやが、さつきに内を出る時に、すこしばらついたゆゑ、傘はなし、それでこれを。マア〳〵、わしよりはそなたの身の上。お屋敷にゐる時分、与茂七といふ許嫁がありながら、この頃聞けば、おそろしい、地獄とやらに……なんぼ貧しい暮らしをしても、武士の娘のあらう事か。トサ、表向きでは言はねばならぬ。そこを言われぬわしが身も、ありやうはそなたの推量のとほり、いやしいわざを勤めるも、年寄つたとゝさんが、貧苦の上にわしらへ気がね。現在娘の兄弟に、隠して。

（105―14　106―6）

㊲お岩→宅悦

コレ、そなたはマア武士の女房に、なんでそのやうにみだら千万。重ねてさやうな不行跡しやると、今度はゆるさぬぞよ　（177―8）

㊳お弓→お槇

イヤ〳〵、案じてたもんな。今日は別にしてこゝろよいはうぢやわいの。たゞ心にかゝるのは、行方の知れぬ民谷伊右衛門。何の遺恨に親人様、娘までも殺害なし、恩を仇なる人非人。わしや腹が立つわいの〳〵……いやもう以前を忘れぬそなたの志、召仕ひとは思はぬわいの。この守りは娘お梅が肌身はなさぬ守袋。死なうはしにか忘れてゆきやつて思はぬ横死。思ひ廻

図表L　「そなた」

代名詞	頁	行	性	話し手	聞き手	性	待遇	備考
そなた	38	14	男	四谷左門	民谷伊右衛門	男	↓	
そなた	74	6	男	佐藤与茂七	お袖	女	―↓	
そなた	266	13	男	直助	お袖	女	―↓	
そなた	267	5	男	直助	お袖	女	―↓	
そなた	269	2	男	直助	お袖	女	―↓	
そなた	286	7	男	直助	お袖	女	―↓	
そなた	298	14	男	小塩田又之丞	お花	女	↓	
そなた	299	3	男	小塩田又之丞	お花	女	↓	
そなた	303	14	男	小塩田又之丞	お花	女	↓	
そなた	308	1	男	仏孫兵衛	お花	女	↓	
そなた	30	2	女	お袖	直助	男	―↓	
そなた	30	7	女	お袖	直助	男	―↓	
そなた	105	4	女	お岩	お袖	女	―↓	
そなた	105	14	女	お岩	お袖	女	―↓	
そなた	106	6	女	お岩	お袖	女	―↓	
そなた	159	3	女	お弓	お梅	女	↓	
そなた	177	8	女	お岩	宅悦	男	↓	
そなた	207	3	女	お弓	お槇	女	↓	
そなた	212	9	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
そなた	213	7	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
そなた	292	9	女	お熊	お花	女	↓	
そなた	292	14	女	お花	次郎吉	男	↓	
そなた	296	3	女	お熊	お花	女	↓	
そなた	378	3	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
そなた	380	11	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
そなた	381	4	女	お熊	民谷伊右衛門	男	↓	
そなた　○	360	6	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	361	6	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	363	12	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	364	1	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	364	4	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	365	2	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	369	5	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場
そなた　○	369	12	男	民谷伊右衛門　（夢）	お岩	女	↓	夢の場

せば思ひ廻すほど、あの民谷めにこのやうに　（207―3）

㊴お熊→民谷伊右衛門

わしもそなたの噂を案じ、こゝで逢うてこのやうな嬉しい事はないわいの。知りやるとほり連合ひ源四郎殿に別れてより、師直様へ御末の奉公。その時のあの顔世様の恋の取り持ち。しぶとい奥方強情ゆゑに塩冶の騒動。その節師直様のおつしやつたは、もしやのちのち難儀な事のある時は、願うて来いとこれ〳〵。これはあの御前様の御判のすわつた御墨付も同前。聞けば我が身は浪人したと聞いたゆゑ、願うて出てそちが難儀を救はうとは思うても、今の亭主は塩冶の屋敷の又者ゆゑ、どうかかうかと思ふうち、伊右衛門という浪人が、女房切つたその上に、隣り屋敷の者どもまでも殺してのいたといふ噂。それゆゑにこのやうに。戒名では目立つまいと、塔婆へ書いた俗名民谷伊右衛門と、そなたは死んだと噂させるわしが献立。何と知恵であらうがの　（212―9　213―8）

㊵お熊→お花

コレ、そなたのへり出したこの餓鬼、ふだんわしがかはいがつてやればよい事にして　（292―9）

次にこれらの用例に現れた「そなた」の対応語を図表に整理すると、対応表K図になる。

このように「そなた」の語群では、対称の動作・存在に関する動詞には「持って来る」に丁寧表現である「下さる」の付いた形「持て来て下され」もみられるが、ほとんど「する」「寄って」「わかる」といった平常動詞との対応である。

また、女性の場合は、対称の動作・存在に関する動詞には「へり出した」というのののしり語もあるが、「思うて」「～する」「切った」等の平常動詞が対応する形が多数見られる。

次にこれらの用例の「話し手→聞き手」における身分関係を調査し、L図に図示する。

L図より「そなた」の語群は、男性も女性も、目下もしくはやや目下に対して使用している。

これらの結果より「そなた」の語群は男女とも、平常動詞を基本的な対応とし、目下かやや目下に対して使用する語であると考える。

（八）

本稿では「こなた」「こなしゅう」「おのれ」「おのれら」「てまへ」「そなた」の六語についての待遇表現価値を明らかにするために考察を行ってきた。各語の待遇意識は明確にできたと考えるが、資料的に不足しているものもあり、これらについては今後の研究課題とする。また自称代名詞についても今後述べたいと思っている。

参考文献

注1 『武蔵野大学日本文学研究所紀要』 第六号 平成30年 武蔵野大学 日本文学研究所

・郡司正勝 『新潮日本古典集成 東海道四谷怪談』 昭和56年 新潮社
・河竹繁俊 江戸文学叢書 第5巻 『歌舞伎名作集 上』 講談社
・山崎久之 『国語待遇表現体系の研究 近世編』 昭和38年 武蔵野書院
・山崎久之 『続 国語待遇表現体系の研究』 平成2年 武蔵野書院
・山崎久之 『増補補訂正版 国語待遇表現体系の研究』 平成16年 武蔵野書院
・小島俊夫 『後期江戸ことばの敬語体系』 昭和49年 笠間書院
・辻村俊樹 「待遇語法」『敬語の史的研究』 昭和43年 東京堂
・大石初太郎 「待遇表現の体系」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』 昭和51年 表現社
・鵜飼伴子 『四代目鶴屋南北論 ―悪人劇の系譜と趣向を中心に―』 平成17年 風間書房
・井草俊夫 『鶴屋南北の研究』 平成3年 桜楓社
・塩見鮮一郎 『四谷怪談地誌』 平成20年 河出書房新社